

【研究論文】

本学初等教育学科 教職科目「教育実習Ⅶ・幼稚園」 事前指導の成果と課題

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 講師 上 村 加 奈

1 はじめに

本学初等教育学科では、幼稚園教諭一種免許の科目として教育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅶの授業を開講している。ここでとりあげる教育実習Ⅶとは、教育職員免許法には定められていない本学科独自の開設科目であり、2年次生対象の観察・参加実習および、その事前事後指導を指す。開講の意図は、3・4年次で実施される本実習前に実施し、保育者としての力量を段階的に養成することにある。1年次の初等教育の基礎理論の学習を踏まえ、2年次より幼児教育コースと児童教育コースに分かれて、本格的な専門教育が開始される。初期段階での学習として、幼児教育の実際を知り、専門的資質能力の実際を体験的に理解する意義は大きい。教育実習Ⅶで培ったものを基礎として、本実習に発展させる重要な学びの場となる。そこで、筆者が授業の主担当として行った、2012年度の受講生64名に対する授業実践をもとに事前指導における成果と今後の課題を明らかにしていく。

2 授業の概要

実習Ⅶの目的は、幼児教育の実際に触れ、教職への意欲を高めることである。目的達成のために、実習Ⅶの目標は「子どもについて理解する」「子どもへのかかわり方について理解する」「保育環境（物的）について理解する」の3つの理解を通して、教育研究課題と自己を発見し、保育者になるこ

授業の構成	主 な 授 業 内 容	検討項目の実施授業
事前学習	オリエンテーション・教育実習Ⅶの位置づけ、意義、概要 観察の仕方・観察の観点 実習園の物的環境の観察 目標と課題設定の意義と書き方 実習日誌の書き方 文章講座（日誌の自由記述欄の書き方・自己紹介文・お礼状） 子どもへの関わり方 実習の心構え（教員より・先輩より）	検討1：観点をもちて観察する体験学習 検討2：目標と課題設定の取り組み 検討3：実習日誌の書き方
実 習 中	附属幼稚園における1週間の実習 観察を主とする。ただし、部分参加（自由遊び・生活場面）をする。 クラス担任に1日の日誌を提出し、指導を受ける。	
事後学習	個人報告書の作成 事後学習会 ①個人報告②グループ討議・発表・質疑応答（2回実施） *最終回は他学年が参加できるように日程調整をして実施する。	

*なお、授業及び実習を行うために必要な仕事については、一人一役を担い係り活動として取り組む。

図1 教育実習Ⅶ（幼稚園）主な授業構成と内容

とへの自覚や使命感を高めるとしている。授業の構成と内容は、事前学習（11回）・実習（1週間）・事後学習（4回）からなる。（図1）

指導教員は、幼児教育関係4名で担当している。課題の添削並びに個別指導は、1名の教員を加わえた5名体制で当たっている。さらに、文章指導には国語系の4名の教員が授業での教授に続く添削並びに個別指導を行うという体制をとっている。実習での学びを確かなものとするために、事前学習では「観点をもって観察することの意義と観察の仕方の理解」「目標と課題を設定する意義と設定のしかたの理解」「実習日誌の書き方の理解」の3点は身に付けさせておきたいと考えている。そこで、前述の3点の学びの状況について検討を行うことにした。

3 学びの状況の分析と考察

ここでは、まず受講学生の実態と、実際に行った授業内容を示す。そして、次に示す資料をもとに分析し考察する。

(1) 分析資料・分析方法

分析資料として、総括評価を用いることとした。総括評価は、受講生対象に全講義終了後に実施した。主な内容は次のとおりである。

①授業への取り組み度合いの自己評価②授業内容が役に立ったと思うか否かを5段階で評価したものと、自由記述③実習中に困ったこと④要望や意見

4つの項目のうち、②の項目結果を用いる。5段階評価の平均値と自由記述内容を基に分析を行う。適宜、授業中の様子、実習日誌、担当教員の所感、出席票の記述、学生の感想も分析の資料として考察する。

(2) 検討1 観点をもって観察する体験

1) 学生の実態

これまでの経験から、一般的な幼稚園の構造や様子の概略は理解している。しかし、受講するに当たり、実習園の様子が具体的にイメージできないと授業の内容が理解しにくい。観察実習であるので、当然、観察することが中心となる。しかし、既存の学習経験として、具体的な観点を意識して観察することを実践したことがないため、意義を理解しにくい。

こうした学生の実態を踏まえ、観点をもって観察することを体験的に学ぶために、履修開始から間もない時期に実習園を訪問し、物的環境の観察を行う。

2) 実施内容

第2講では、観点をもって観察することを概説する。実習で理解することを目標としている「子ども」「保育者」「保育環境」のうち、まずは保育の物的環境を観察する観点の洗い出しを行う。観点の洗い出しは、学生の既存の知識を発表する形式をとりながら、確認をしていく。翌週となる第3講に、降園後の実習園を訪問し、園の物的環境を観察する。特に、保育室は入念に観察し、物の配置や置き方なども記録する。次講までに観察記録レポートを作成し、第4講ではレポートをもとに振り返りを行う。ここまでの学習を基にして、子ども・保育者に視点を当てた観点の洗い出しを行う。

3) 総括評価からの考察

観察の観点の学習に関して、役に立ったとするポイントは、5段階で4.59であった。自由記述の主な内容は次の通りである。

①プラス面の理由

- ・初めてで何もわからなかったけど、何をどのように見たらいいかが分かり、取り組みやすかった。
- ・どのようなところへ注意すべきなのか、自分たちで考えて出しておいたことによって意識が高まった。
- ・観察する観点を学んでいたから（中略）何を重点的に見ればいいのか分かった。

② マイナス面の理由

- ・実習に行くのが初めてでありイメージがわからなかった。
- ・実際に何をどのように見ていけばいいのかわからなかった。

平均値と上記の内容から、概ね成果が上がったと言える。授業中の様子からすると、学生が発表するという双方向のやりとりをして洗い出しを行ったことで、お互いに刺激しあい、既存の知識を基に具体的に観点を絞り込むという作業を繰り返したことも要因として挙げられる。また、観点をまとめたものを資料として配付したことも功を奏したのではないかと考える。さらに、観察の観点の学習が、その後の目標と課題の設定の取り組みに活かすことが出来た、また実習中に活かすことが出来て観察のポイントをつかみやすく日誌が書きやすかったという記述もあった。しかし、2名とは言え理解できないとする学生がいることは課題である。うち1名は、実習中も観点が不明瞭であったとしている。当該学生の実習日誌を見てみると、観察できた部分も少なく、子どもと保育者の行動レベルの記述が多い。観察の観点の理解不足が、実習での学びに影響していることが分かった。授業中は、4名の教員が机間指導を行っているが、個別の理解度の把握方法を検討する必要があることが分かった。

次に、実習園の見学に関して、役に立ったとするポイントは、5段階で4.50であった。自由記述の主な内容は次の通りである。

- ・実際に行ったことで、使われている教具やその配置、園庭の様子を事前に見て知ることが出来た。
- ・実習を行う園がどのような様子か、事前に見学することで、実習を事前にイメージしやすかったし、意欲を高めることが出来た。
- ・園の工夫や特徴を知ることが出来た。

自由記述の内容を見ると、物的環境の理解はもちろんのこと、実習の事前学習として、イメージ化を図ることや、学習意欲の向上に役に立ったとする記述が多いことが分かる。観察直後に作成したレポートでは、観点をもって観察したことで、詳細な点まで理解することが出来たという記述も見られた。概ね成果が上がったと考えて良い。

幼児教育を理解し、実践力を身に付けていくためには、まずは観察力を養うことである。観察をもとに、子どもの気持ちや保育者の行動の意図までも掴むことが求められる。そのためにも、観察・参加実習の根幹をなす観点をもった観察を実習前に経験し、意義を見出すことは重要である。

(3) 検討2 目標と課題設定の取り組み

1) 学生の実態

本学科では、実習を実りあるものにするために、実習ごとに目標と課題の設定を課している。学びの内容を焦点化し、具体的な取り組みを考えて実習に臨むことにより、学びの深まりを目指している。初めてとなるこの実習では、目標と課題の意義から理解していくことになる。保育者となる力を養うために、目標達成に向けた取り組みを、体系的に考える力をつける必要がある。

2) 実施内容

目標と課題の意義と書き方を説明する。但し、今回は初めての实習であり、段階的に学ぼうにするため、実習で理解することとして掲げた3点を目標として教員が示した。学生は、目標達成に向けての課題の設定のみに取り組むこととした。教授内容を踏まえて、課題を設定したものを基に個別指導を行う。個別指導としたのは、次の3点のねらいからである。

1点目は、一人ひとりが既存の知識を基に、より具体的に実習をイメージして事前学習に取り組めるようする。2点目は、個々の力に合わせ着実に力をつける。3点目は、個別指導は完成期限を設定

し、期間内に学生が自主的に指導を受けに行く形式にしている。これにより、自己のスケジュールを管理しつつ、見通しをもって物事を成し遂げていく力を養成したいとのねらいがある。

3) 総括評価からの考察

目標と課題設定の学習に関して、役に立ったとするポイントは、5段階で4.59であった。自由記述の主な内容は次の通りである。

- ・あらかじめ何を学ぶのかを明確にすることで、実習中に観察の視点を絞ることが出来た。
- ・分からないことがあったので、実習中に先生に質問するなどして、目標と課題を達成するように取り組めた。
- ・先生に見てもらいながら決定したことで、より具体的なものを設定することが出来た。

自由記述の内容から、学生自身の中で、実習で学ぶ内容を明確化することに繋がっていったことが分かる。それにより、観察の視点や実践することが明らかとなり、迷った時の指標となったとしている学生もいた。学習中の学生を見ていると、初めての取り組みではあるし、教員とのやりとりを何度も繰り返すことに、いささかのしんどさを感じている様子が伺えた。しかし、努力して作り上げたことより活用できるものとなっていったようである。少数意見ではあるが、実習中は目の前のことに一生懸命になり、意識できなかったとする者もいた。初めての实習であり、これも正直な実態であろう。この実態を踏まえ、全体指導と個別指導の内容検討をしていく必要がある。

指導担当教員の所感をまとめると、次のようになる。学生により差はあるが、2回から5回程度の個別指導で合格域に達している。完成することが目標ではあるが、課題に取り組むプロセスにおいて、学生に実習のイメージがわいてくる手応えを感じている。ただ、幼稚園の活動場面がイメージしにくい学生がおり、指導に苦慮することがある。実習は学生の潜在的課題が表出しやすい。個別指導は、地道な取り組みと言えるが、学生個々の特性を知る機会となり実習指導の足掛かりとなっている。また、目標と課題を意識して実習することにより、振り返りが出来ることはもちろんであるが、これ以降の実習の目標と課題設定の際、自身の課題克服と、学びたいことを明確にして目標並びに課題設定に取り組んでいる学生の姿に触れる時、この取り組みの意義を実感する。

(4) 検討3 実習日誌の書き方の学習

1) 学生の実態

幼稚園実習の日誌に触れた経験がなく、日誌の表現のしかたを全く知らない。また、記録すること、文章を書くことに苦手意識や抵抗を感じる学生がいる。幼児教育の基本については、他の講義で学習し理論として理解しているが、具体的な場面での理解には至っていない。

2) 実施内容

日誌の書き方の授業展開として、まず、日誌を記録することの意義と具体的な書き方の説明をする。次に、観察メモの取り方と、メモした内容をまとめて日誌に記入する方法を説明する。この際、幼稚園の1日を紹介した映像を視聴しながらメモを取り、メモの内容を吟味して日誌の項目別に適切に記入するという一連の流れを繰り返し、体験的に学ぶという方法をとっている。

3) 総括評価からの考察

日誌の書き方の学習に関して、役に立ったとするポイントは、5段階で4.72であった。自由記述の主な内容は次の通りである。

- ・初めはどうやって書くのか分からなくて戸惑ったけれど、授業で何度もDVDを見て練習し、グループ毎に自分がメモしたことを発表しあったりして、だんだんとポイントをつかんでいきました。
- ・日誌の書き方を授業で何度もやり、プリントもあったおかげで、書けるようになるのに苦労しませんでした。
- ・(前略)しかし、実際には同じ場面は二度とない上に、出来事をどこまで書けばいいのか分から

なかった。

・(前略) DVD を見て書くのと、実際に実習に行って書くのとは違って難しい。

上記の内容のうち、先述の2点が大半の記載内容である。資料提示と模擬体験の反復学習が効果的であることが分かる。この点については、今後も継続していきたい。授業中の様子を見てみると、目の前で起きることを目的的に観察すること、メモをとること、日誌に記入すること、それぞれのポイントを掴むことに苦心している様子がうかがえた。そこで授業の展開として、まずは自分自身で取り組み、次にグループ内で見せ合い、最後に全体で発表しあって必要な内容がメモできているか、また、日誌の記述が適切かを研鑽するという形式をとった。すると、仲間の良い点や自身では見逃していた点に気づくことが出来、学びあいの中での成長の姿を見ることができた。1度での習得は難しいと考え、3講にまたがり実施した。その際、前回出来たことと出来なかったことを確認しながら取り組んだ。学生の授業記録から、反復学習したことも成果が上がった要因ではないかと考える。さらに、少しずつ実際に近い形にしていっていった。例えば、初回はメモを取って内容を整理した後に、再度映像を流してメモの取り具合を確認したが、徐々に1回のみでの映写とした。慣れてきたら、立位でメモを取るようにするなどの工夫をした。成果の確認が出来たが、一方で実際の実習場面に応用することに難しさを感じている学生がいることも分かった。日頃の様子から、既習内容を応用することや、場面に応じた対応をする力の養成途上にある学生がいることを実感している。この点については、実習園に学生の実態を伝え、連携を図りながら指導していくことを検討する。

次に、学生が記入した日誌を、初日から順に観ていくと、日を追って量・質ともに向上していることが分かる。初日と最終日では格段の差である。初日は、一つの活動場面に對する内容が少なく、空欄がある学生も目立つが、日に日に記入量も増え、内容面でも充実している。保育者の援助の欄では保育者の行動だけではなく、その意図の記入も見られるようになる。事前指導でも援助の意図を記入するように指導してはいるが、毎日の幼稚園での反省会で、担当教諭から実際に観察した事例をもとに援助の意味を指導され、実感として理解してきたためであると思われる。また、実習中の学生の発言から、実習初日はメモを取ったもの、適切であるかどうか自信がない。帰宅後、日誌に向かうがうまくまとめることが出来なかったという実態であることが分かった。書けなかった部分は観察できていないところであると捉え、翌日の観察に活かすように指導すると、徐々にではあるが書けるようになっていく。この事例からも、記録することで、観察が的確になることが分かる。

さらに、教育実習Ⅶ(観察実習)を終えた学生に日誌記入について質問すると、一応書けるようになったと思うが、書き方を理解できているかどうか自信がないという返答である。続く3年次の教育実習Ⅱ(本実習)では、教育実習Ⅶでの学びを踏まえたところからスタートする。初日から、ある程度メモが取れ、日誌をまとめることが出来る現実から、日誌の書き方を理解している自分に気づく。教育実習Ⅱでは、日誌記入に加え指導案の立案も課せられるため、教育実習Ⅶでの学びの意味を理解し、段階的に学ぶことの重要性を実感するのである。

4 成果と課題

今回、授業内容の検討を行い、成果と課題が明らかになった。総括評価を記名としたため、学生の本当の声がひろえなかったかもしれないという点は考慮しなければならない。しかし、特に、事前学習として身に着けておきたい3点について一定の成果があることは確認できた。一方で、少数ではあるが今後の課題を示唆する状況があることも分かった。多様な学生を対象として、一定の力を着けていこうとする時に、全ての学生を対象としつつ、早期に個の課題を見つけて対応していくことの重要性を感じている。授業実践の課題に対する対応策として次の5点がある。

1点目は、実習の実際の様子を具体的に理解出来るようにするために、実習園での実習の様子を映した教材の作成を計画している。初めてのことは視覚情報を用いながら説明すると理解しやすく、かつ不安軽減につながる。今回は初めての幼稚園実習となるため、視覚教材を活用した授業の展開を考える。

2点目は、観察の観点の学習を基にして日誌を書く学習を行うため、日誌の学習で使用するワークシートの点検を行い、個別の理解状況の確認をする。今年度も、各回の理解度を確認していたが、日誌の書き方の学習では総合力が問われるので、全体の理解度と個別の課題を明確にして、各回毎に実態に応じた一斉指導の内容と個別指導の方法を検討する。

3点目は、学生相互の学びあいのシステムづくりである。学生の様子を見てみると、2年生の段階での学生相互の結びつきは弱いと感じる。3年4年となるにつれ、絆の基に支えあい、指摘しあい集団の質が変わってくる。しかし、初めての実習に臨む不安や、理解しにくいことに仲間と取り組む経験が必要である。また、自ら学ぶ姿勢を身に着けることが重要である。空きコマを利用して、時間外学習の場と参加しやすい雰囲気づくりをし、学習効果向上と自立的学習者の養成を目指したい。

4点目は、教育実習Ⅶからはじまる教育実習の連続性である。学生の状況を担当で共通理解し、指導の方向性を確認しながら積み上げ方式で進めていきたい。

5点目は、この授業の到達目標に対する自己評価を活用し、自己の課題克服に向けた実践を支援する体制づくりをする。

研究に対する今後の取り組みとしては、次のように考えている。今回は、実習先の指導教員の評価は分析資料として挙げていない。実習後に大学教員と実習園とで会合を設けてはいるが、詳細に項目立てた情報収集までは行っていない。検証を確かなものにするために、次回は実習園の指導教員の詳細な評価も集約する必要がある。その結果を基に、実習園と連携した養成となるように考えていきたい。また今回は事前学習について検討したが、引き続いて事後学習のあり方についての検討もしていくことが課題である。

最後に、保育者として求められる姿と、学生が今まで身に着けている力との隔たりの大きさを、年々感じている。今年度は、実習中の様子から、指示されたことを的確に捉え行動に移す力の弱さがあることが分かった。年々その状況に拍車がかかるのではないかと推察される。そうすると、教授内容が膨らんでくることとなる。今後、短い期間で学生の実態を把握し、育成目標に照らし合わせながら着実に力をつけるための方策を検討することが必要である。教授内容の精選と授業研究と並行して、子どもの人的環境となる保育者になることを自覚して、目指す保育者像に向けて、自主的に取り組む学生の養成が求められている。

5 おわりに

今回、検討事項としては取り上げなかった3点の取り組みを付記しておく。

1点目は、文章講座の取り組みである。保育者として仕事をしていく上では、保育記録・児童の成長記録・お便りなど、文章を書く力が求められる。近年、エピソード記録の導入や、保育実践記録の活用の推進による保育の質向上が言われる。また、保育の計画と記録を使った省察のために、事実を正確に捉え、他者に分かりやすい記録を書く力が求められている。しかし現実には、活字離れが進み、コミュニケーションツールとしてメールが多用され、国語力の低下が懸念される昨今である。手紙に至っては、日頃の生活で書いたことがない学生がほとんどである。この現状を鑑み、授業の中に文章指導を盛り込んでいる。

2点目は、履修者全体で取り組むことを、役割分担して係り活動として取り入れている。保育現場

に出た時には、保育を進める一方で、園務分掌に従って、運営の役割を担うことになる。それを見据えた取り組みとして、一人一役の役割を担うことにしている。同一係りのメンバーと、連携を図りながら協力し合い物事を成し遂げていくことを課している。十分な取り組みとは言えないが、全体を見ながら考えて動く経験の足掛かりとして欲しいと願い、指導しているところである。

3点目は、縦のつながりを重視した取り組みである。四年制大学で学ぶ利点を活かし、他学年との交流を図る仕組みづくりをしている。学びの連続性と継承を意図したものである。上級学年の学びに触れる、下級学年に助言をする等である。具体的には、他学年の実習報告会に参加する、下学年の実習ガイダンスの一役を担う等を実践している。上級学年の報告会に参加することで、知識を得るだけでなく、以降の学びの指標を得て意欲的になる学生も少なくない。また、報告会において、他学年や他コースの学生から新しい視点の質問や意見がでることもあり、学びの深まりとなっている。下級学年へ助言する取り組みについては、後を追う後輩を思い、学生が自主的に、配慮や思いのこもった資料を作成して助言をすることが継承されている。一歩前を歩く先輩の話を聞く後輩の顔は真剣そのものである。互いに刺激を受けあい育ちに繋がっている。今後も学年を越えた集団作りとして、大切にしていきたい取り組みである。

文献

- 今井和子（1999） 保育に生かす記録の書き方 ひとなる書房
二階堂邦子責任編集（1999） 教育・保育・施設実習書 建帛社
鯨岡峻 鯨岡和子（2007） 保育のためのエピソード記録入門 ミネルヴァ書房